

## 探索としての伝記文学

—A・J・A・シモンズ『コルヴォー探索』

富士川 義之

1

大学で教えることを辞めてから早いものでもう八年も経ちます。まさに無常迅速ということ最近を身に染みて感じております。それでも私のような者でもまだ元気なうちにやれることが少しでもないだろうかと思うことがときどきあります。幾らかそんな思いにも駆られて、足かけ五年がかりの仕事として『ある文文学者の肖像——評伝富士川英郎』を執筆いたしました。長年ドイツ文学者であった私の父がなぜ五十代を過ぎてから菅茶山や頼山陽などの江戸後期の漢詩人の研究に熱心に打ち込むようになったのか。随分以前から私にとってよく分からなかったその謎を探ることをテーマにして手紙や日記やノートなどの一次資料が身近に残っていたという好条件にも恵まれて何とかやりとおすことができました。原稿用紙千枚近くの長さの評伝として完成し、おかげさまで思いがけなく好評を得て二つの賞をいただくこともできました。

この評伝の執筆中のことですが、ひょっとしたら執筆の参考になるんじゃないかとも思い、また気晴らしもあって以前からいつか読みたいと思いつきながらも、なかなか読まないで書棚に放置されたままになっている著作の幾つかにときどき目を通すことができました。そうして読んだ著作のなかにリットン・ストレイチーの *Portraits in Miniature* (『てのひらの肖像画』) があります。ストレイチーの伝記文学では、『ヴィクトリア朝偉人伝』、『ヴィクトリア女王』、『エリザベスとエセックス』などの彼のメジャーな作品はかつて興味深く読んだことがありました。しかし『てのひらの肖像画』は

このときが初めてです。古本屋で買っておいたのに積ん読のままになっていたのです。これは一九三一年に出版されていますから、翌年の三二年に五十一年の生涯を閉じているストレイチー最晩年の、最後の伝記作品です。『てのひらの肖像画』は彼のメジャーな伝記作品に比べると、いかにも小粒で簡潔でマイナーな作品であることは明らかなのですが、ほんの五、六ページ、長くてもせいぜい十数ページの長さの、文字通り「てのひらの肖像画」を一筆書きのようにして描くことを通じて、個性的な人物像と、彼または彼女が生きた時代や文化をあざやかに浮き上がらせるその語り口の卓抜さ、見識の高さ、エレガントな文体などに感嘆いたしました。

「よい伝記を書くことは、おそらく、よい人生を生きるのと同じくらいむずかしいと、われわれは考えないのである」とストレイチーは言います。彼は、このような自己省察をつね日頃から重ねている伝記作家の抱く歴史のヴィジョンというものを重視しています。「人間というのは大切な存在であるから、単に過去を説明する徴候(‘symptoms’)」として扱われてはならない。人間がもつ価値は、時代の流れから独立したものであって、価値それ自体のために感じとられねばならぬ永遠のものである」とストレイチーは言うのですが、そういうふうには過去の人々が見えて来るのを、まともな伝記作家のもつ歴史のヴィジョンだと言いたいのでしょうか。遠い歴史のなかに消えた人物の肖像画を言葉で描くのは大層難しいことを知悉した人物による味わい深い言葉です。

ストレイチーは、『てのひらの肖像画』において、まるでエリザベス朝時代の古いミニアチュアの肖像画を連想させるように、十六世紀から十九世紀にかけての英国の、十八人の有名無名の文学者や歴史家や聖職者や学者などの短い伝記的肖像画を興味深く描き出しています。彼は個人の歴史である伝記というものは、単なる事実の寄せ集めではなく、文体の力によってオムレッツという芸術作品に仕上げなくてはならないとつねに考えていました。その著名な例として『てのひらの肖像画』のなかで取り上げているのが十七世紀英国の文人ジョン・オーブリーの代表作『名士小伝』です。ストレイチーは、オーブリーの『名士小伝』は、「十七世紀イングランドに関する最も重要かつ権威ある本であるばかりか、読んで面白いという点でも最高である」と述べています。そして非凡な人物の非凡な生涯を、磨き

ぬかれた短い文章で瞬時のうちに照らし出すほとんど神わざに近い効果を成し遂げていると言って、オーブリーを絶讃しています。さらに「伝記はボズウェルの『ジョンソン博士伝』くらい長いか、オーブリーの『名士小伝』くらい短いか、どちらかがいい。『ジョンソン博士伝』のように、伝記的事実を膨大かつ精密に積み重ねるという方法ももちろんすばらしいが、それができない場合は、中途半端はやめてほしい。純粋なエッセンスだけあればいい。説明も転調も批評もむだ話もいっさいしない。ほんの数ページのあざやかな肖像画があればいい。オーブリーがわれわれに提出するのはまさにこの純粋なエッセンスであり、あざやかな肖像画である。そして『名士小伝』がわれわれに提出するのはもうひとつあって、それは風変わりな錬金術さながらに、ほんのわずかな伝記的断片を黄金の生命に変えてしまう、作者オーブリーの勤勉かつ愉快的人間性である」

ここでストレイチーはオーブリーについて語りながら自分自身をも語っています。と同時に自分がめざす伝記文学のヴィジョンをも語っていることは明らかでしょう。

こんなふうにして私は、ストレイチーを読むことを通じてがぜんイギリスの伝記文学に興味を持つようになりました。父親の評伝を書き終えたなら二十世紀英国の伝記文学を楽しみながら少し系統的に読んでみようかと思うようになったのです。とりわけ「伝記を変えた伝記」を書いたとしばしば評されるストレイチーに始まる一九一〇年代後半から三〇年代にかけての、いわゆる兩次大戦間の英国の文学界では、さまざまな伝記文学が登場し、ストレイチーやヴァージニア・ウルフを中心に伝記についての批評や講演がさかんになされているということに以前から気づいていたものですから、そのあたりのいきさつを少し調べてみようかと思立ったわけなのです。何にしるこの時代の新人作家たちの多くは、たとえばグレアム・グリーンがロチェスター伯の、イーヴリン・ウォーがロセッティの、アントニー・ポウエルがオーブリーの伝記を書くことで作家として出発しているのですから。

## 2

ところで二〇一〇年秋から二〇一一年冬にかけてロンドンのナショナル・

ポर्टレート・ギャラリーで *Imagined Lives: Portraits of Unknown People* という展覧会が催されました。大震災の年でもあってその展覧会場に出かけることはできず、ただカタログを入手して目を通しただけなのですが、これは大変興味深い催し物であったのではないかと思います。カタログによると、この展覧会では、一八五八年から一九七一年までのあいだにこの美術館が購入し所蔵していた多数の肖像画のうちで、十七、八点の肖像画のモデルがすべて、最近の研究によって、長年にわたりそうと見なされていたのとは違う人物たちを描いたものであることが判明したということです。そうした今も正体不明の人物たちの肖像画のみを集めて一同に展示するという変わった展示会であったというわけです。展示されたのは、十五、六世紀の人物を描いた肖像画が大半なのですが、面白いのは、正体不明の人物がそれぞれどのような人物であったのかを、現在活躍中の作家たちに想像させ推理させるという試みです。たとえば、ジョン・バンヴィルやジュリアン・フェローズやジョアンナ・トロローブたちがごく短い、まさに「てのひらの肖像画」を言葉で描いていることです。一番印象的なのは、カタログの最初に掲げられているのですが、スコットランド女王メアリーを描いたものと長年信じられて来た肖像画です。これは実は女王の侍女をつとめていたエディンバラのある商人の娘をモデルに描かれた肖像画だと現在は見なされています。メアリー女王は自分の秘書が暗殺されたあと、権謀術数の渦巻く宮廷でほとんど誰も信用することができなくなり、自分に直接危害が及ぶことを避ける目的で、自分の替え玉というか、自分のいわば分身、ダブルとなってくれる侍女に女王の役を必要に応じてつとめさせていたのです。その商人の娘を描いた肖像画が随分長期にわたってスコットランド女王自身の肖像画として通用していたというわけなのです。そしてこの肖像画について現役の作家が色々推理や想像をめぐらすという趣向になっているのです。

私はこのメアリー女王の贋作をながめていてふと連想したのが、オスカー・ワイルドの「W・H氏の肖像画」です。あのかなり長めの短編小説では、ご承知の通り、シェイクスピアの『ソネット集』の「唯一の生みの親」として献呈されている「W・H氏」とは一体誰なのかという謎を解明することを中心にプロットが展開します。そしてそのW・H氏の肖像画が見つ

かり、それはウィリー・ヒューズというシェイクスピアと同時代人である少年俳優を描いた肖像画であって、この少年俳優こそがシェイクスピアが『ソネット集』を献呈したほかならぬW・H氏であるのではないかという極めて大胆な推理を展開していくのです。だが、その肖像画は贋作であるということが明らかにされます。それでもなお、ウィリー・ヒューズがシェイクスピアのW・H氏であるという説が正しいとする主張に添って、『ソネット集』のなかからこの少年俳優について言及したり彼のことを暗示していると見る具体的な詩句などを色々と引っ張って来て、その説の正しさをほとんどやっきになって証明しようとしています。第二章の最後のところで、ウィリー・ヒューズに取り憑かれ、W・H氏とはこの少年俳優にほかならないという自説を熱心に主張するシリル・グレアムはこう述べています。「ウィリー・ヒューズのなかに、シェイクスピアは自己の芸術的表現のための繊細きわまる楽器だけでなく、自己の美の観念の目に見える具体化をも発見したのであって、イギリス文学のロマン主義運動は、同時代の作家たちが愚かにもその名前を記録するのを忘れたこの若い俳優に負うところが大きかった、と言っても言い過ぎではない」

よく指摘されるように、『ソネット集』に詠われた美少年像のなかに、シェイクスピアの同性愛的感情を読み取り、そうした感情こそがシェイクスピアの芸術的表現の根幹を支えており、そこに同じく同性愛者であったワイルド自身が共感し、ロマン主義的な芸術家としての自分自身を重ね合わせているということは明白でしょう。ワイルドの性的アイデンティティーを探っていくうえで、「W・H氏の肖像画」が、決して見過ごせない、重要な作品であることは確かだからです。評論と小説とが入り混じっているようなこの独特な作品において、ワイルドがシェイクスピアの『ソネット集』をほかならぬ自分自身が日頃から抱いている問題と結びつけて読もうとしていることは疑うべくもないからです。しかしながら、私はいまここで、そういったこの作品の重要なテーマとか、内容とかいった問題に深入りするつもりはありません。私が注目してみたいのは、この作品の形式というか、具体的にはまず「ポートレート」（「肖像画」）というタイトルであり、W・H氏とは誰なのかという謎を解き明かそうとするいわばミステリー仕立ての物語構成にあります。

「W・H氏の肖像画」という短編は、この作品の二年前に出版されたウォルター・ペイターの短編集『イマジナリー・ポートレート』（『想像による肖像画』）に大層触発され影響を受けた作品ではないかと思えます。ペイターが「イマジナリー」という形容辞に力点を置いていることは一目瞭然ですが、その点でこの『イマジナリー・ポートレート』は、オーブリーの『名士小伝』からストレイチーの『てのひらの肖像画』にいたる、歴史のなかの個人の行跡や逸話などを断片的に、ささやかな規模で提示した小伝集よりむしろ、ペイター以後にいささかの流行を見る、実在架空を問わず、想像や推理によって人物を作り上げていく創作短編集としての性質を著しく備えているのではないかと思います。たとえばアーサー・シモンズの『魂の冒険』とか昨年一卷本の全集の翻訳が出た英国最良の世紀末フランスの文人マルセル・シュオブの『架空の伝記』とか、あるいはボルヘスの『汚辱の世界史』などを連想させることが少なくないでしょう。先ほどちょっと触れたナショナル・ポートレート・ギャラリーで開催された *Imagined Lives: Portraits of Unknown People* のカタログも、おそらくはそうとはっきり意識することなく、ペイターに始まる「イマジナリー・ポートレート」の伝統を結果的には現代に甦らせている興味深い企ての一つと言ってもよいでしょう。

ワイルドは「W・H氏の肖像画」において、実在する人物なのか、それとも架空の人物なのかよく分からないW・H氏という謎にみちた人物の正体を探索することに多大な関心をもってこの作品を書いています。そもそもこの謎の人物とは一体何者なのかという、ミステリーの手法を「イマジナリー・ポートレート」という新しい文学ジャンルに持ち込んだところに、ワイルドの独創性があったのではないかと思います。ワイルドがシャーロック・ホームズを生み出したコナン・ドイルと全くの同時代人であったことは改めて言うまでもないでしょう。「W・H氏の肖像画」において、ワイルドは言ってみればペイターとコナン・ドイルの手法のいわば融合を試みているのです。

### 3

だいぶ長い前置きになってしまいました。このあたりでそろそろ本日の

講演のテーマであるA・J・A・シモンズの伝記文学『コルヴォー探索』に移らなければなりません。『コルヴォー探索』などと言っても、あまり耳にしたことがない作品名だというのが、とくに日本ではたぶん大方の反応ではないかと思われます。そこでごく簡単にコルヴォーについて、まず紹介しておきます。

コルヴォーというのは自称で、彼は通例コルヴォー男爵と称していました。裕福なあるイタリア貴族の老婦人に気に入られて彼女から「男爵」の称号を与えられていたからです。彼は一八六〇年七月にロンドンのチープサイドでピアノ製造業者の息子として生まれ、キャムデンタウンの学校では古典語学習もしっかりとやり、好きな科目では目覚ましい成績を残したというのに、父の反対を押し切って十五歳で退学します。その後しばらくオックスフォードの聴講生として勉強し、つぎにまずは教師になり、それからローマ・カトリックに改宗して神学生になります。次いで司祭職を志望するのですが、教会や修道院では下働きしかさせてもらえず、しかも司祭たちから嫌われて途中で逃げ出したあと、放蕩無頼の生活を送って家族との亀裂を深め、やがてロンドンやオックスフォードやアバディーンなどを転々と放浪しながら、長年にわたる孤独と貧困生活のなかで小説を書きはじめるといふ極めてエキセントリックな人物で、本名はフレデリック・ロルフといます。ロルフは五十三年の生涯において、一九〇四年に出版した代表作である長編小説『ハドリアヌス七世』のほかに「イエロー・ブック」に連載した短編をまとめた『トト物語』、長編『ニコラス・クラソプ』や『ドン・レナート』、『ドン・タルキーノ』や『ボルジア家の歴史』などの歴史書、『ルバイアート』の翻訳などを発表します。また画家としての才能もあり、さし絵や本のデザインなども手がけています。こうしてロルフは貧困生活と自分の文業を認めようとしないうちの世間に対する慢性的な怒りをかかえ込んだまま、放浪先のヴェニスで一九一三年に不遇のまま生涯を終えました。年齢的にはワイルドよりも六歳年下です。ワイルドとの接触は全くなかったようですが、世紀末のデカダンス芸術や文学に多大な興味をもち、「イエロー・ブック」とも多少の接触があり、幾つか短編も寄稿しています。おまけにワイルドと同じく同性愛者でもありました。また、ワイルドなど世紀末の文人たちと多くの付き合いのあった詩人・作家のヴィ

ンセント・オサリヴァンと神学生時代に親しかったことがあるようです。『コルヴォー探索』の著者A・J・A・シモンズは、フレデリック・ロルフは「生まれつき教会の人間」であり、もしも彼がカトリック司祭になっていたならおそらく作家にはなっていなかっただろうと述べています。だが、彼は生涯司祭になることができず、支払えないほどの借金を重ねながら小説や歴史書などを書きつづけていました。蔵書や祈祷書などの装丁にひどく金をかけるなど趣味に凝ったり、ごくたまに印税が入るとすぐに湯水のごとく使ってしまうような破滅的な生活を送っていました。もしも幸せな境遇にいたならばウォルター・ペイターのような文学的人生を送ったであろうとも評されている作家です。

ロルフは一九一三年に極度の貧困のうちにヴェニスで孤独死しますが、その死後、彼の名前はほとんど忘れられてしまいます。『コルヴォー探索』の冒頭は次のように書き出されています。一度読んだら忘れられない、大変印象的な書き出しです。その箇所を読みます。

「私のコルヴォー探索は一九二五年の夏、クリストファー・ミラードの家で偶然に始まった。小さな庭に二人でのんびりと腰を下ろし、賞賛を受けたり影響力があつたりしても当然なほど素晴らしいのになぜか見落とされている書物について話をしていたときだった。私はプロットの傑出しているレ・ファニユの『ワイルダーの手』やアンブローズ・ピアスの『悪魔の寓話』を挙げた。ミラードはそれにはなにも言わず、ちょっと間をおいて、「あなたは『ハドリアヌス七世』を読んだことがありますか」と訊いた。読んだことがないと告白すると、彼は貸してあげましょう、というのである。驚きだった。本をめったに貸さないし、貸すのにいい顔をしない人なのだ。日陰に埋もれている本についての知識が膨大なことを知っていたので、私はためらうことなく申し出を受けた。こうして、まったく思ってもみないところへたどりつく第一歩を踏み出したのである」

この『コルヴォー探索』の原書は、一九六六年にペンギン文庫に入ったものが以前は普及していたのですが、現在は、二〇〇一年にニューヨーク・レヴュー・ブックス社のペイパー・バックで作家A・S・バイアットの序文付きで出版されたものが入手しやすいでしょう。また邦訳は二〇一二年に早川書房から『コルヴォーを探して』というタイトルで出ています。



ここでいま読んだ『コルヴォー探索』の冒頭の文章に少し説明を加えておきます。作者シモンズが訪れたクリストファー・ミラードというのは、ロンドンの古書店主で、若い頃にはロバート・ロスの秘書をつとめたこともありました。このロバート・ロスはご存知のように、初のワイルド全集でワイルドの名誉回復をはたしたワイルド生前からの親友です。ミラードはスチュアート・メイスンの名でオスカー・ワイルドの作品目録を編纂したこともあったが、その後熱烈な社会主義者となり、生活のために小規模ながら稀覯本や珍書を扱う古書店を始め、この生業とわずかな年金と友人のロバート・ロスからの年百ポンドの遺贈金で暮らしを立てていたようです。彼はロンドンのアバコーン・プレイスという所にあるヴィクトリア朝様式の屋敷裏の掘立て小屋にまったく一人きりで住んでいました。彼は大変なグルメで、好物だった鮭はスコットランド産の極上の切り身でなければ駄目だとか、ランチはパンとチーズだけで済ませたが、チーズはいつも最高級のスティルトンと決まっていたそうです。このように相当偏屈で風変わりな人物であったようです。しかし詩への愛情と十九世紀イギリス文学への深い知識の持主で、シモンズはこの人物のおかげでコルヴォー男爵の生涯と作品について初めて知ることになるのです。

作者A・J・A・シモンズもまたかなりエキセントリックな人物であったようです。ダンディを気に入り、大変なグルメでワインと食物の協会を創立してそこの初代会長をつとめたり、熱心な愛書家ビブリアファイルでもあり、初版本蒐集クラブをつくったり、ヴィクトリア朝の骨董品の著名なコレクターでもありました。彼の弟のジュリアン・シモンズは著名なミステリー作家・評論家で、ペンギン版の『コルヴォー探索』に寄せた「序文」のなかで、兄のシモンズは生前にオスカー・ワイルドの伝記の決定版を書く計画を立てていたようです。だが、シモンズが一九四一年に四十一歳の若さで死去したため、ワイルド伝の実現はなりませんでした。このようにミラードもシモンズもともに、ワイルドとの少なからぬ縁えにしを感じさせる人物たちです。

シモンズはミラードが貸してくれた一九〇四年発行の、フレデリック・ロルフの長編『ハドリアヌス七世』を好奇心いっぱい読み始めるのですが、二十ページも読まないうちにその好奇心は本を推挙してくれたことへの感謝の気持ちへと変わったと記しています。さらに「身体からだの奥底から何かが

変わるような、あの典型的な初体験の感触を持ったのである。小説を読み終えてすぐに再読したが、その印象は強まるばかりだった。そのとき思ったことはいまでも変わらない——イギリス文学史上、もっとも秀逸な作品の一つだ。なるほどマイナーな作品ではある、にもかかわらず、これに匹敵するだけのものを書くのは至難<sup>わざ</sup>の業だ。独創的で、機知に溢れ、明らかに生まれながらの作家たる人物の作品。卓越した言葉づかいと情景描写、このうえもなく並はずれた個性を生き生きと表現する仰天するほどの巧みさ」と讃辞の言葉をつらねています。

シモンズが感嘆した『ハドリアヌス七世』とはどのような作品なのか、まだ日本語訳が出ていないので簡単に紹介しておきます。物語の主人公ジョージ・アーサー・ローズはカトリック教徒で、何度か司祭職を志願したもののことごとく退けられ、しかも高位の司祭たちから聖職者不適合という烙印を押されてしまい、その挫折感が二十年ものあいだ心の奥で疼きつづけています。しかし、司祭たちからは認められないのに、司祭職を自分の天職だと思ふローズの考えは微塵も揺るがない。やがて司祭の一人がローズに対する従来の扱い方が不当であったことを遅ればせながらも後悔して、当局に再考を促すべく進言します。こうして今度は枢機卿が、二十年前と少しも変わることなく、聖職に対して忠誠心をもちつづけるローズに感嘆し、遅まきながら償いをしようと、除け者にされていたローズに司祭職につく気がないかと打診します。こうしてローズは、いままで不当な扱いをしていたことを文書で認めることと、これまで無償でカトリック宗派のために尽くしてきたのだから、それ相応の補償金を支払うという条件付きで聖職につくことに同意します。この条件が認められると、彼は過ちを公式に認めた文書を暖炉の火のなかに投げ込み、支払われた補償金も半分は慈善事業に寄付する、と言って返却します。その後ローズは、ローマ教皇選挙のコンクラーベにおいて、選挙が行き詰まって教皇選出がなかなか決まらないときに、ひょんなことから二十年にもわたって困苦と試練につねに耐えながら変わることなく天職への信仰をもちつづけたローズのことが枢機卿たちのあいだで話題となり、あれよあれよというまに、教皇の候補者にかつぎ出されてしまい、ついには教皇に選出されてしまうという物語です。教皇に選出されたあと、教皇名には何を選ぶかと訊かれると、「前の

イギリス人教皇はハドリアヌス四世であった。この度のイギリス人教皇はハドリアヌス七世である」と宣言し、教皇としてカトリック世界に君臨することになります。

一種のサクセス・ストーリーではあるのですが、実生活において、作者のフレデリック・ロルフは、司祭職に就くことを熱望しながらもかなわず、教皇どころか司祭にさえもなることができず、あり余る知性と学識の持主ながらも、恥辱にまみれ窮乏に苛まれながら異国で絶望のうちに死んでいくという、まさに悲劇的な没落の人生を辿らざるを得なかったのです。最後の手紙の、最後の言葉は「どうぞ一生のお願いです、五ポンド送って下さい」でした。『ハドリアヌス七世』は、そのような悲惨な境遇にあった作者コルヴォー男爵による、いわばドリーム・ストーリーであったのです。

シモンズはついにローマ教皇ともなるローズという驚嘆すべき人物像を造形した天才的な作家の人生の没落がどのようにして、またなにゆえに生じたのかを知りたいという熱望に突き動かされて、彼を直接知る人物たちを直接訪問したり、手紙のやりとりなどをしながら、執拗に探索をつづけていきます。シモンズは『コルヴォー探索』の第八章「奇妙な歴史家」の冒頭で自分の伝記の方法についてあらましこんなことを述べています。

ふつう、伝記作家は、自分の扱う人物やテーマに関してはあらかじめきちんと調査してほとんどすべてを知り尽くしているという前提に立っているものである。手紙、日記、作品、同時代の関係者たち、疑問の余地のない生前のさまざまな事実といったものが照合され、篩にかけられて、確かな執筆を可能にすることができる。「しかし、私のこの評伝は違うやり方をしている。ここまでは（つまり第八章までは）、読者に提供されるのは（調査結果を分析した上での集約ではなしに）調査のプロセスそのものである。ロルフのような特異な人物の場合はこの方法が適切だと信じている。真実はいろいろな形をとる。私のコルヴォー男爵探索を照らす光と闇のドラマティックな交差は、一人の人物を語るいかなる語よりも真実としての価値があると確信している。そこで、私はどちらの側につくこともなく、公平にすべての面を明るみに出して判断を仰ぐようにした」

シモンズは、ロルフのような、その生涯と作品がほとんど分からない特異な人間の場合、彼を直接間接に知っていた同時代の関係者たちに会っ

て証言や情報を得たり、手紙で問い合わせるなどといった探索や調査のプロセス自体を整理して年代的に提示するという、これまでに例のない新しい伝記の方法に依拠せざるを得ないと述べているのです。シモンズはまた、一九二九年発表の「伝統と伝記」というエッセイで、ある人物の生涯を、いわゆる「ゆりかごから墓場まで」という具合に年代を追って記述する十九世紀風な伝記の手法に異議を唱え、そうした伝記的因習に反逆して、単なる事実の寄せ集めではなく、人物の正体や本性を暴露することに重きを置く新しい伝記スタイルを切りひらいたリットン・ストレイチーを擁護しています。シモンズにとって、伝記の目的というのは、何よりもまず、事実を記録することではなく事実の探索を通じて人物の正体や本性を明らかにすべきものなのでした。シモンズがかくもコルヴォー探索にのめりこむように熱中したのは、それまで未知だった不可思議な魅力をもつ無名の作家が一体どのような人物であったのかをもっと知りたいと思ったからでしょう。さらにコルヴォーについて知れば知るほど、コルヴォーほどではないとしても、ダンディでグルメ、愛書家であり、変り者の趣味人、伝記作家でエッセイストでもある自分自身と微妙に響き合う感性や性質を敏感に感じ取っていたからでもありましょう。そのあたりの心情について、コルヴォーの知人からの手紙を引きながら、シモンズはこう書いています。

「未知の作家、とくにフィクション作家の人間性に心惹かれるのはなんなのでしょう。私たち読者を楽しませ、スリルを与え、あるいは登場人物の心理のえぐり方で感動を与えるということかもしれません。ですが、たいがい、誰でも持っている感情の挫折や私たちが翻弄する運命に作者が示す理解と共感のせいではないでしょうか。それによって自分の苦しみを分かち持ってくれるという感情が生まれるほどの個人的な以心伝心が生じ、長いこと埋もれていて、声にならず、共感を得られなかった悲しみを解き放ってくれるという感じになるのかもしれません。少なくとも、私はそうでした」

シモンズはコルヴォーの生涯と作品のなかに、とりわけ同時代人の反応としてはほとんど例外として、D・H・ロレンスに擁護された『ハドリアヌス七世』のなかに、「誰でも持っている感情の挫折や私たちが翻弄する運命に作者が示す理解と共感」を敏感に感じ取り、見出したのです。探索と

しての伝記文学である、A・J・A・シモンズの『コルヴォー探索』における人間性の探求に惹かれるのは、私にとって、つまるところ、「長いこと埋もれていて、声にならず、共感を得られなかった悲しみを解き放ってくれる」ところにあると言っても過言ではありません。伝記文学の面白さと魅力の多くは、そうした人間性の探求にあると思うからです。

『コルヴォー探索』という伝記文学を読んでいていつも私が思いを馳せる文学作品があります。それは森鷗外の史伝『渋江抽斎』です。これは江戸時代に出版された武士の人名録といった書物である『武鑑』を探し集めてゆく過程で「弘前医官渋江氏蔵書記」と朱印のある本にたびたび出会うめぐり合わせとなつてがぜん、渋江抽斎とは何者かという興味を掻き立てられた鷗外が、抽斎という人物を探索するプロセスそのものが伝記となっているという作品です。こうした伝記制作のプロセスそのものを中心にするといったタイプの伝記は、わが国でも鷗外の『渋江抽斎』に始まり、その後たとえば一例をあげると、一九七五年出版の足立巻一『やちまた』(中公文庫)などの目ざましい結実を生み出しています。『やちまた』というのは、本居宣長の長男に生まれ、三十代半ばで失明しながらも、文法学者として日本語の動詞活用を研究し、『詞の八衢』<sup>ことば やちまた</sup>を著して国語学史上に不滅の業績を残した本居春庭の伝記です。学生時代に春庭のことを講義で知り、その波乱の生涯に深く魅せられた著者が半生をかけて書き上げた伝記文学の傑作です。二〇一五年に中公文庫に入って復刊したので、興味のある方はぜひ手に取ってみられるとよいと思います。

また『コルヴォー探索』以後、ある人物を探索するプロセス自体が伝記とも小説ともなっている作品として作品名だけでもぜひあげておきたいのは、一九四一年に出版された、ウラジーミル・ナボコフの英語による最初の小説『セバスチャン・ナイトの真実の生涯』です。わたしは以前からナボコフはなぜ英語で書く最初の極めて大事な、決して失敗の許されない作品として、虚構の伝記という形式を選んだのか、という疑問をもっていました。ロシア語ではなく英語で読む読者の注意をもらひ引きつけなければならぬための、いわば文学的戦略として、兩次大戦間に大きな話題を呼び、実験的な新しい伝記作品が次々に発表されて注目を集めていた英国の伝記文学に目をつけていたのではないか、などといったようなことを、昨

年秋のナボコフ学会での講演で雑談風にお話しいたしました。実際、ナボコフは一九三〇年代にハロルド・ニコルソンの伝記文学 *Some People* を読み、その影響力はまるで麻薬のようであったとニコルソンの息子で、例の『ロリータ』の英国での出版を引き受けてくれたナイジェル・ニコルソンに向かって打ち明けています。そのことを復刊された *Some People* に寄せたナイジェルの「序文」で初めて知り、その発言にヒントを得て、「ナボコフと英国の伝記文学」というタイトルで講演をさせていただきました。『コルヴォー探索』について、ナボコフはまったく言及していないので、不十分な点は色々あるのですが、彼はあの伝記文学の傑作をきっと読んだに違いないと私は見えています。時間が押し詰まってまいりました。このあたりでまとまりのない雑談風の話を終わりたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

引用・参考文献

- Imagined Lives: Portraits of Unknown People*. National Portrait Gallery, 2011.
- Nabokov, Vladimir. *The Real Life of Sebastian Knight*. New Directions, 1959. (『セバスチャン・ナイトの真実の生涯』、富士川義之訳、講談社文芸文庫、一九九九)
- Nicolson, Harold. *Some People* (With 'Introduction' by Niger Nicolson). Constable, 1982.
- Rolfe, Frederick. (Baron Corvo). *Hadrian the Seventh*. Penguin, 1969.
- Strachey, Lytton. *Portraits in Miniature*. Chatto & Windus, 1931. (『てのひらの肖像画』、中野康司訳、みすず書房、一九九九)
- Symons, A. J. A. *The Quest for Corvo*. Penguin, 1966, New York Review Books, 2001. (『コルヴォーを探して』、河村錠一郎訳、早川書房、二〇一二)
- Wilde, Oscar. *The Portrait of Mr W. H.* Wordsworth Editions, 1997. (「W・H氏の肖像」、西村孝次訳、『オスカー・ワイルド全集4』所収、青土社、一九八九)
- 森鷗外『渋江抽斎』(中公文庫、一九八八)
- 足立巻一『やちまた』上下(中公文庫、二〇一五)